
初恋は、臆病の味。

三条陸巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋は、臆病の味。

【コード】

N0674U

【作者名】

三条陸巳

【あらすじ】

「ねえ、私と付き合おう？」

俺の少し後ろを歩いていた彼女の突然の言葉に、自分の耳を疑った。

ショート・ストーリー。

恋愛独特のもどかしさを感じていただけたら幸いです。

「ねえ、私と付き合う？」

俺の少し後ろを歩いていた彼女の突然の言葉に、自分の耳を疑った。

付き合うって、一体誰がお前と付き合うっていうんだ？

俺は立ち止まり、彼女の方を振り向いた。

夜の闇の中、月明かりが彼女を照らしているだけで、彼女がどんな表情をしているかは分からない。

「……詩織？」

夜の闇に、声が吸い込まれていく。段々と自分の心臓の音が煩くなるのを感じた。

「付き合おうかって、言ったんだよ」

彼女がふつと笑いながら言うものだから、俺も笑ってみせた。自分自身から聞こえてくる、煩い心臓の音をかき消す為に。

「冗談言ってるんだよ。そういうのは本気で好きなヤツに言え」

何言ってるんだ、俺。

「別に、雄貴だったら付き合ってもいいって思ったから言ったんだけど」

お前がそう言うんだったら、付き合ってみるか。

そう言えよ、俺。

「バーカ。どうせ冗談だろ？ 騙されないからな」

俺は自分であきれぐるくらい、臆病な人間だった。

「……うん、冗談に決まってるじゃん。なんだ、騙されると思ったのになあ」

そう言って、詩織は笑った。彼女が俯いてしまったから、笑顔をすることは出来なかったけれど。

あれ以来、俺たちはお互いを何となく避けるようになった。

同じクラスで毎日喋るような仲だったのに、一体どうしてこうな
ってしまったのだろうか。

学年が上がりに、彼女とはクラスも離れ、やがて友達伝いで詩織に
彼氏ができたことを知った。

俺があの時、「付き合おう」「って言ったら。詩織と付き合っ
とができたのだろうか。

今となっては分からない。俺の、初恋の思い出。

(後書き)

ショート・ストーリーです。

短い文章の中で、恋愛独特のもどかしさを表現することに挑戦してみました。

ライトノベル作家を目指しており、小説の感想や批評などを今後の執筆活動に活かしていきたいので、随時募集しております。
よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0674u/>

初恋は、臆病の味。

2011年10月6日16時11分発行